鳥取の民話 48

収録・解説　酒井董美

語り手　片桐利喜さん（明治30年生まれ）
昭和61年8月5日収録

瓜姫

（西伯郡大山町高橋）

イラスト・福本隆男

あらすじ

昔、じいさんとばばさんといた。じいさんは山に行き、ばばさんは川で洗濯していたら、瓜が流れてきたので持って帰り斗櫃に入れておいた。

じいさんが戻った。「今日は瓜がああけん」て斗櫃開けてみたら、かわいげな女房の子が出てきた。「瓜だったに女房の子が出てきた。うちの子にせんならん。瓜姫と名につけよう」

そうから、かわいがって育てておった。

十五、六になって機織りするようになった。「畑に行きてくうけん、この機織れ。アマンジャクが来ても、戸を開けんなや」とように言っちょいた。

天の邪鬼が自ら姫に

瓜姫さんが戸をたっちょって、機織らはあにアマンジャクが来て「ちょっこり開けてごしなはい」と言いだども、「開けんな、て言わはつたけん開けられん」て言ったけんな、そうほどよか開けはい」てって言いだ。

そか「手の入あほど…なら、そうほどよか開けんど」と開けっさったら、ダーッと入って来て、瓜姫さんを裸にして瓜姫さんの着物をわが着て、そって聞かんだけん。「手の入あほど開けてごしなげして瓜姫さんは柿の木のテンパ（てっぺん）につり上げて、そげしちょったら、じいさんやばばさんがもどってきて「瓜姫がおらん」なんてことで。

アマンジャクが「瓜姫さんは木のテンパ。アマンジャクはここにおる」てって、瓜姫の着物着ちょった。

そうから、がいに怒ってじいさんがアマンジャクを三つに切って、ソバとカヤとキビの根に埋めっさっただって。そで、根の方がそのアマンジャクの血で赤いのだって。その昔こっぽしゴンボの葉。

解説

関敬吾『日本昔話大成』では本格昔話「誕生」に「瓜子織姫」として登録されている。

1、子のない老夫婦。川上から流れて来た瓜の中から生まれた娘を子供として育てる。

2、両親の留守中（嫁入り仕度）天の邪鬼が家に侵入し、（a）姫を殺して自ら姫になる。（b）姫を誘い出して木に縛りつける。

3、天の邪鬼、偽の花嫁として嫁入りする。途中で（a）小鳥（姫が化した）が花嫁は天の邪鬼であると鳴いて知らせる。（b）木に縛りつけられた姫が花嫁は天の邪鬼であることを告げる。

4、偽の花嫁は（a）追放される。（b）両足を牛と馬に結わえつけて股裂きにする。

片桐さんの話ではアマンジャクが瓜姫の居場所を白状するなど、一部混乱が見られるが、これも伝承の地方色の一つであろう。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。